

全国自治体病院協議会雑誌の「緑陰随想」に投稿した内容です。ご笑読ください。

人間の年齢と馬齢と犬齢と猿齢

十和田市立中央病院 事業管理者 丹野弘晃

司馬遼太郎さんのエッセイ集である「司馬遼太郎が考えたこと 6」を読んでいたら、大変面白い内容に出くわした。ご本人が、ある知人からまた聞きで聞いたハンガリーの民話とのことである。

むかしむかし、神さまは人間に二十五年の寿命しかあたえなかった。馬には百年あたえ、犬にも猿にも百年あたえた。ところが馬が神さまに抗議して、「どうも百年も人間のために働かされてはたまりません。そのうちの二十五年を人間にくれてやりたいと思いますがどうでしょう。」と、言った。神さまはそれを許した。すると犬も抗議した。百年も吠え続けてはやりきれないから、自分も百年のうち二十五年を人間にやりたい、というのである。神さまは仕方なくその申し出を許可した。最後に猿も、こう言った。私も同じです。百年も人間に見られ続けては（この民話では猿は芸でもして、人間に見られるというだけの存在のようです）とても退屈でたまりませんから、百年のうち二十五年を人間にくれてやりたい、と、言った。神さまはそれも許した。

そういうわけで、人間は百年という寿命をもつことになったのだが、この民話が言うには、人間が人間である時期は当初のとおり二十五歳までしかないということのようだ。これが、さらに面白い。つまり、われわれが人間であるのは二十五歳まででしかなく、二十六歳から五十歳までは馬であり、五十一歳から七十五歳までは犬であり、七十六歳から百歳までは猿であるということになる。司馬さんは、たしかに馬の時期は、それこそ馬車馬の如く働いており、とても人間とは思えないと指摘されている。犬の時期も、保守的になり、若者のすることがすべて気に入らず吠えちらし、その上自分の領域をまもる性質が強くなって、少しでもそれを侵して入ろうとする他人に対して吠えまわっていると表現されている。猿の時期になってしまうと、民話ではただ見られるだけの能無しの動物となっているので、恍惚の人をイメージされていた。なるほどと、心底合点がたって、思わず吹き出してしまった。

この民話はハンガリーのものではなく、元々は中国のものではないかとの説もあるようだが、いずれにしろ大変興味深いストーリーである。人生百年時代を先見している点もすばらしいし、二十五年ごとの区切りも現状にマッチしていて絶妙である。特に、日本老年医学会がエビデンスを踏まえての高齢者の定義を七十五歳以上と提唱していることとの一致には、びっくり仰天である。

私事で恐縮だが、今年度生存を保てれば、古稀を迎えることになる。犬の末期

で、猿間近という年齢である。認知症の周辺症状で頻度が高いのが、易怒性とのことのようにだ。私自身吠えまくってはいないと思うが、これからは常に日々のフレクシオンは欠かせないと身に染みて感じた。そして願わくは、民話上の猿にはなりたくないものである。人間に戻るためには、常に二十五歳までのあのまだ汚れていない(?) 純粹で無邪気なころに帰る必要があることも感じさせてくれた。世阿弥の名言と言われる「初心忘るべからず」である。世阿弥曰く、第一の初心だけではなく、その時々々の初心や年を取ってからの初心と、複数の場面でその重要性を説いている。つまり、人間としてはもちろんのこと、馬として、犬として、そして猿としての初心もあるということだ。残り5年は、毎日犬として吠えまくるのを我慢しながら謙虚に生き、猿として生きることができるのであれば、口をつぐんでにこにこ笑っている姿を見せたいものである。この拙文を読んでもださったあなたは、人間?馬?犬?それとも猿? (失礼をお許してください。)

2024年8月6日